

第2部

青少年長崎平和使節派遣



「平和の泉」の前で

派遣生（敬称略）

小野寺 紅永（高校生）

古川 美幸（高校生）

坂梨 太祐（中学生）

渡邊 賢吾（高校生）

堀内 萌奈（高校生）

伊藤 亜希子（社会人）

引率者

総務部総務課平和担当 野口 武之

榎村 潤

1. 行動日程表

第13回青少年長崎平和使節派遣 平成27年8月8日～10日(2泊3日)

8月8日(土)

時間	行動内容	場所
6:30	集合	JR大井町駅中央口
8:15	羽田空港発	羽田空港
10:05	長崎空港着・リムジンバスでホテルへ	長崎空港
11:30	ホテル着	ANAクラウンプラザホテル長崎
12:00～	昼食	平和公園近辺
13:00	★青少年ピースフォーラム受付	平和会館ホール
13:30～15:10	★開会行事等(被爆体験講話など)	平和会館ホール
15:10～17:20	★参加型平和学習 (被爆建造物等のフィールドワーク)	山王神社 (被爆2の鳥居、被爆大クス) 長崎医科大学 (正門門柱、配電室)
18:00～	夕食	長崎市内
19:00～20:30	「平和の灯」事業見学	平和公園入口～平和の泉周辺
21:00	ホテル着	ANAクラウンプラザホテル長崎
22:00	就寝	

8月9日(日)

時間	行動内容	場所
7:00	起床	
7:30	朝食	ホテル内レストラン
9:00	ホテル出発	ANAクラウンプラザホテル長崎
9:30	平和公園着	平和公園
10:40～12:00	平和祈念式典参列(長崎市実施)	平和公園・平和祈念像前
12:00～	昼食	平和公園近辺
13:30～15:30	★平和学習	長崎ブリックホール国際会議場
15:30～17:30	自主研修	浦上天主堂、永井隆記念館ほか
17:30～	原爆資料館見学	原爆資料館他
19:30～	夕食・ホテル着	長崎市内
22:00	就寝	

8月10日(月)

時間	行動内容	場所
7:00	起床	
7:30	朝食	ホテル内レストラン
9:00	ホテル出発	ANAクラウンプラザホテル長崎
9:00～14:30	自主研修・市内見学(昼食)	長崎市内
14:30	集合	長崎新地バスターミナル
14:45	リムジンバスで長崎空港へ	
16:30	長崎空港	長崎空港
18:15	羽田空港着	羽田空港
19:30	解散	JR大井町駅中央口

★は青少年ピースフォーラム事業(長崎市主催)

「青少年ピースフォーラム」とは？

毎年8月9日の平和祈念式典にあわせて、長崎市では、「青少年ピースフォーラム」を平成5年度から開催しています。「青少年ピースフォーラム」は、全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的としています。

このフォーラムには、大学生や高校生などで構成される長崎市の「青少年ピースボランティア」が中心となって、平和学習の進行やフィールドワークの案内などを行っています。

2015年は「品川区青少年長崎平和使節」をはじめ、全国から443名もの青少年が参加し、ピースボランティアなど82名と交流を深めました。

日	時	内 容 《場 所》	
1日目 8/8 (土)	13:30 14:45	開会行事（開会宣言、市長挨拶、被爆体験講話） 《平和会館ホール》	
	14:45 14:55	被爆70周年記念・ヒロナガ presents ピースレンジャー	
	15:10 17:20	【コース別の平和学習】被爆の実相を学びます。	
		Aコース あの夏を忘れない ～70年前の長崎～ 《平和会館ホール》	Bコース 歩いて学ぶ70年前の長崎 《原爆資料館周辺》
	18:00 19:30	交流会（希望団体） 《長崎新聞文化ホール》	
2日目 8/9 (日)	午前	平和祈念式典への参列 《平和公園内平和祈念像前広場ほか》 または 長崎市内学校での平和集会への参加	
	13:30 15:30	【コース別の平和学習】平和の尊さについて考えます。	
		Aコース 平和な世界をつくるために 《平和会館ホール》	Bコース 伝える～私からあなたへ～ 《長崎ブリックホール国際会議場》

事前打ち合わせ会

派遣生が平和使節派遣事業の趣旨を理解し、それぞれが目的を持って長崎への派遣に臨めるよう、事前打ち合わせ会を2回実施しました。

打ち合わせ会では、参加者の自己紹介や参加への動機、非核平和都市品川宣言事業および青少年長崎平和使節派遣の目的についての説明、自主研修の検討等を行いました。

また、平和への願いを込めて長崎へ持って行く千羽鶴を全員で作成しました。

〈第1回〉6月23日（火）午後6時～

- ・自己紹介
- ・参加動機の発表
- ・「非核平和都市品川宣言」事業の説明
- ・「青少年長崎平和使節派遣」の目的を説明



〈第2回〉7月22日（水）午後6時～

- ・「平和の折り鶴」受領
- ・スケジュールの最終確認
- ・自主研修の検討
- ・ピースフォーラム事業について説明
- ・自主研修計画表の提出
- ・派遣報告書類の説明

事後報告会



8月21日（金）午後6時～

今回の平和使節派遣を通じて印象に残ったこと、学んだことなどを話し合いました。

また、来年度の事業運営に生かすため、感想・意見を発表してもらいました。

- ・派遣の感想、反省発表
- ・成果報告書について
- ・青少年ピースフォーラム修了証書および派遣修了証書授与

2. 長崎での主な活動

(1) 青少年ピースフォーラム開会行事（被爆体験講話）

<日 時> 8月8日（土）13：30～14：45

<場 所> 平和会館 3階ホール

<内 容> 開会式は青少年ピースボランティアが司会をつとめました。被爆体験講話では、爆心地より1.5キロの農家で被爆し、原爆で第4人や母親を失った中村一俊さん（当時山里国民学校6年生・11歳）の話を聴講しました。「原爆は身体に影響を及ぼしたり人の命を奪ったりするだけでなく、心に傷を残すものなのだ」と、当時の様子について写真等を交えて熱く語っていただきました。



青少年ピースフォーラム開会行事
(司会の青少年ピースボランティア)



被爆体験講話 講師の中村一俊さん

<堀内 萌奈>

家族を亡くし、早く忘れてしまいたいくらい辛い思い出を話して下さり、心に響きました。そして、中村さんが私たちに託した思い「核兵器をなくすよう声をあげる」を実践したいと強く思いました。

(2) 被爆建造物等のフィールドワーク

<日 時> 8月8日(土) 15:10～17:20

<場 所> 原爆資料館周辺(山王神社コース)
・山王神社(被爆二の鳥居、被爆大クス)
・長崎医科大学(正門門柱、配電室)

<内 容> 原爆資料館周辺の被爆建造物や慰霊碑などを青少年ピースボランティアと一緒に見学し、被爆の実相を学習しました。



山王神社(被爆大クス)



山王神社(被爆大クスの説明文)



山王神社(被爆二の鳥居)



長崎医科大学(正門門柱)

<渡邊 賢吾>

原爆による熱線や爆風、放射線の恐ろしさを身をもって知ることができました。
後ろに壁がある。たったそれだけで生死をわけることもあり、寒気がしました。

(3) 平和祈念式典

<日 時> 8月9日(日) 10:35～11:48

<場 所> 平和公園内平和祈念像前広場

<内 容> 被爆70周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列し、原爆が投下された
11時2分には、一斉に黙とうを捧げました。



平和祈念式典に参列



11時2分 黙とうを捧げる

<古川 美幸>

式典は今年で被爆70周年を迎えたということもあり、想像以上に多くの人々が参列していました。多くの方が「平和」に関心を持っているのだと感じることができ、とても嬉しく思いました。私は「長崎の次にもう原爆で被害にあうところがないように」という思いで黙とうをしました。

(4) 平和学習（意見交換）

<日 時> 8月9日（土）13：30～15：30

<場 所> 原爆資料館会議室等

<内 容> 青少年ピースボランティアを進行役として、核兵器のない平和な社会を作るための一歩として、「身近な問題」についてグループに分かれて意見交換を行いました。



ピースボランティアと意見交換



グループで協力して作った資料



全国から集まった青少年が交流

<小野寺 紅永>

広島・長崎の人達だけでなく、他にも多くの都道府県の人達が平和について考え、また平和を実現するために行動していることが分かりました。私自身も、平和のためにまずすべきことが「知る」ことであると分かりました。

(5) 長崎原爆資料館見学

<日 時> 8月9日(日) 17:45～18:30

<内 容> 被爆資料や被爆の惨状を示す写真などの展示物を見学し、「当時の被害状況」や「核実験の放射能」などを学ぶことで、派遣生一人ひとりが戦争の悲惨さを感じ取り、平和に対する意識を改めて強く持ちました。

館内の資料等を見学する派遣生たち



<伊藤 亜希子>

原子爆弾の人体に対する恐ろしい影響を写真資料で目の当たりにし、おぞましさを感じました。同じ惨劇をもう二度と繰り返してはならないと、強く痛感しました。

(6) 自主研修・市内見学

<日 時> 8月 9日(日) 15:30～17:30

10日(月) 9:00～14:15

<場 所> 長崎市内

<内 容> あらかじめ計画を立て、ピースフォーラムでは行けなかった被爆関連施設や市内の名所などを巡りました。



浦上天主堂



原爆落下中心地碑



千羽鶴を捧げる



昼食(トルコライス)



眼鏡橋



出島

<坂梨 太祐>

永井博士の心の広さや愛の大きさに一番感動しました。また、壊れた建造物からどれほどの原爆の強さだったのかわかりました。(9日) 長崎の良い所がたくさん観ることができて楽しかったです。(10日)

<小野寺 紅永>

事前学習で掲げた「原爆投下後の被爆者の生活・心情を学ぶ」という目標を意識して取り組むことができました。(9日) 現在の長崎の様子を知ることができました。とても活気があり70年前のことが嘘のように思えました。(10日)

<伊藤 亜希子>

見学した場所それぞれに千羽鶴がたくさん供えてあったことが印象的でした。原爆投下時間の11時2分にどこにいて何をしていたのかが、命運を分けたのだと思うと、なぜ犠牲にならなければいけなかったのかと悔しく、悲しくやりきれない思いでいっぱいになりました。(9日) 長崎の坂道や街並みを歩いて、良いまちだなと実感しました。8日、9日と原爆の恐ろしさや当時の様子を学んでいたのも、復興までの道のりや、今こうして過ごしている日常がどんなに幸せなことなのかを考えさせられました。(10日)

<渡邊 賢吾>

浦上天主堂や原爆落下中心地のように原爆の被害がわかるような場所や永井隆記念館や平和祈念像のような被爆者の気持ちがわかるような場所もありました。(9日) グラバー園でハートの石を見つけたり、長崎中華街の角煮まんが美味しかったことや、眼鏡橋でもまたハートの石を探したりして、良い思い出になりました。(10日)

<堀内 萌奈>

永井隆博士記念館を見学するまで永井博士がどのような方がよく知りませんでした。重い病気を抱えても弱音を吐かず、戦争のない世界を願い続けた博士の姿に心を打たれました。(9日) グラバー園や眼鏡橋でたくさんハートの石を見つけられたことが良かったです。また、名物の角煮まんも食べることができました。

<古川 美幸>

浦上天主堂、原爆落下中心地、永井隆記念館や平和祈念像などを見て回りました。原爆により実際にどのような被害があったのかその惨状をよく知ることができました。(9日) 現状の長崎はとても賑やかで明るく活気のある所でした。グラバー園や眼鏡橋でハートの石を探したりしました。(10日)

3. 成果報告書

被害の大きさ、悲しみの大きさ

小野寺 紅永

原爆記念日が近づくとつれて、テレビやラジオなどのメディアで「広島・長崎」というフレーズが流れるのをよく耳にしました。広島、長崎—いつもこの順番で。これは、原爆が投下された日にち順だというのが最もたる理由でしょう。もしかしたら原爆による被害の規模の順かもしれません。

しかし私は、この順番のせいで長崎の人々が受けた悲しみの規模まで小さいと認識してしまう人がいないかととても不安でした。

一日目の被爆体験講話でお話を下さった中村一俊さんは、今でも七十年前のあの日のことを昨日のことのように憶えているとおっしゃっていました。父を探すため焼け焦げた死体の中を歩く恐怖、三日間かけて探した母が本当はもう死んでいると悟った瞬間の悲しみ、そして道に倒れていたり少年に水をやれないまま死なせてしまった後悔。中村さんは、たった十一歳で外傷よりも遥かに深く重い傷を心に負いました。それでも原爆の悲惨さや戦争の愚かさを後世に伝えるために、七十年もの間、懸命に生きてきたのです。強いと思いました。もし私が中村さんの経験した状況に陥ったとしたら、きっと 悲しみに押し潰されて、その先の未来を生きていくことはできなかったと思います。

講話のあとのフィールドワークではたくさんの方の被爆建造物などを見学し、今も残る原爆の爪跡を見ることができました。中でも「七十年草木は生えないと言われた中で芽ばえ、長

崎の人々の心の支えになった」という被爆クスのノキは、広島にある被爆したアオギリに通じるものがあり、とても印象に残りました。

二日目、一瞬にして罪のない多くの命を奪い、絶対に癒えることはない傷を残した原子爆弾が長崎に投下されてから丁度七十年がたった八月九日。この節目の年に、私達は平和祈念式典に参列することができました。長崎に落とされた原爆によって亡くなった方々に黙とうする一分間、私は何度も何度も、この言葉を頭の中で反芻していました。

「長崎を、最後に。」

その気持ちは、原爆資料館を訪れたことで更に強くなりました。

長崎の原爆資料館は、広島の前爆資料館と比べ小規模だったように思います。正直、「えっ、もう終わり？」と思ったくらいです。しかし、その少ない展示物の一つ一つが原爆の恐ろしさや愚かさを物語っていて、何より資料から伝わる悲しみと原爆に対する怒りが広島の前爆と何ら変わりはありません。

私は始めに、「広島・長崎」の順番と受けた悲しみの大きさが比例すると思っている人がいないか不安だと述べましたが、派遣を終えた今思うことは不安ではありません。

そういった誤解をなくすために、もっとたくさんの方に負の歴史も問い、戦争や原爆について知ってもらうために、今自分にできることは何か。これが、今思うことの大部分です。

二年前広島平和使派遣に参加したときは、過去を過去のまま置き去りにせず、未来へと繋げていくことが大切だと思いました。勿論、今でもそれは大切なことだと思っています。

けれども、今回長崎に派遣生として訪れてみて、「伝える」ことより先にまず「学ぶ」

ことをしなければならぬと感じました。

特にここ東京では、広島や長崎のように幼い頃から戦争教育をするということをしませんが、これは何も東京に限ったことではありませんが、こういったことから歴史の風化が始まっているのだと私は思います。

私達現代人は戦争や原爆を知らない。それにも関わらず歴史を伝えていかなければならない。そんな複雑な立場にいるからこそもっともっと学ばなければいけないのに、これでは歴史が伝わらないどころか、ついには消えてしまうかも知れないのです。

「学ぶ」とは言っても、被爆者の方々が感じた悲しみや恐ろしさや怒りは計り知れないし、私たちにそれらを理解することは絶対にできないでしょう。

しかし、それでも何が起こったかを自分で学ぶことはできるはずです。

現在、被爆者の平均年齢が八十歳を越してしまったこともあり余計に「学ぶ」機会が減ってきてしまっています。

だからこそ、私達は動かななくてはならないのです。

私は、もう二度とこんな悲惨なことが起こらないように、また長崎と広島が受けたような同じ大きさの悲しみが生まれないように、ただ願うだけではなく行動することを誓ってこの先を生きていきます。

長崎派遣レポート

渡邊 賢吾

戦後 70 年たった今だからこそ考えなければならぬ。

被爆者の平均年齢が 80 歳を超え、戦争の

愚かさを伝えてくれる方がどんどんいなくなってきています。もうこの事実はどうしようもないのです。

ではどうすればいいか。その答えを探るのが今の私たちに課せられた義務だと思っています。

このきっかけを作ってくれたのは、被爆体験者の方々のとても悲しく壮絶なスピーチと、多くの方が書き残していった資料でした。

学校などでも戦争体験講話や集団疎開の体験講話などを聞きましたが、たいして覚えてません。何故なら全く興味が無かったためです。「もう終わったこと」「今の私たちには関係ないこと」など心の中で思っていたからです。そして今回の青少年長崎平和使節派遣も偶然行くことになりよくわからないまま長崎に飛びました。

青少年ピースフォーラムで私たちに核兵器の悲惨さを伝えて下さった中村一俊さん。中村さんは当時 11 歳の若さで母親と兄弟をなくし、今もお被曝で苦しんでいます。中村さんはある少年を助けられなかったという話をしていた際、自分の命すらも危うい状況で父親とも会えなくなっているのにもかかわらずその事をとても悔やんでおられました。人は恐怖から逃れるために辛いことから目を背けます。見たいものだけ見て、考えたくないことは自然と考えません。このような状況に際し、中村さんは 70 年たってもこの悲劇を忘れられないでいました。

平和祈念式典で被爆者代表として「平和への誓い」を行われた谷口稜暉さん。谷口さんは当時 16 歳で郵便配達をしていた時、背後

から虹のような光が目に入り強烈な爆風で吹き飛ばされて地面に叩きつけられたそうです。谷口さんの体は皮膚が垂れ下がり背中は一画大火傷で1年半以上死の淵をさまよったそうです。生々しい体験談の後、谷口さんは言います。「日本は戦争をしないと憲法が制定するのに集団的自衛権の行使容認を押し付け、憲法改正を進め、戦争の時代に逆戻りしている」と。ここまで真に迫った言い方をするのは予想外でした。被爆者は今の日本をどう見ているか、日本は被爆者をどう見ているか。谷口さんらの気持ちを踏まえて、よく考えて欲しいです。

長崎の派遣が終わったあと色々調べてみたところ、戦争体験世代の比率の変化では2000年で戦争体験者世代が23.5%だったが、2025年後には6.2%、2050年には0.1%にまで減少してしまいます。

また、2013年にNHKが実施した世論調査によると、「日本が真珠湾を攻撃して、太平洋戦争が始まった日」を知っていた人は20~30代では6.9%、40~50代では16.5%、60代以上では24.8%でした。つまり若者の戦争への知識は確かに少ないのですが、戦争世代に近い高齢者でも4人に1人しか正解していないのです。

そして最初の疑問に私が出した結論はこのようになりました。

私たちは戦争の歴史に対し辛くても目を背けず正しく認識し、過去の過ちを風化させることなく皆で考えていくことが大事だと思います。誰もが戦争を望んでいませんが、未だ

に世界中で戦争、紛争が起きています。日本は唯一の被爆国としてもっと世界に関わり合い、戦争がいかに愚かで間違っているかを伝えていき平和を訴えていく必要があると思います。

戦後70年たった今、平和な世の中です。この尊い平和を大切にしていき、いつまでも戦後と言え国でありたいものです。

長崎で学んだこと

～ 平和の大切さ ～

古川 美幸

今回の派遣で私は初めて長崎を訪れた。長崎の街へ着いた時、ふと、長崎は暑いし蝉もよく鳴いているなあと感じた。70年前も同じ様であったのだろうか—そう考えを巡らせた直後、ぞくぞくと寒気がした。先ほどまで五月蠅うるさいくらいに鳴いていた蝉の声が薄れていく。私は気づいた。70年前は夏の暑さではなく、爆風の熱さで熱かったのだという事に。当時、蝉の声に耳を澄ます余裕などどこにも無かった事に。

私は、一昨年の夏、品川区広島平和使節派遣生として広島へ行った。今回、私がこの長崎平和使派遣事業に応募したのはそれがきっかけだ。広島では、戦争の怖さ、原爆の恐ろしさなど多くの事を学び、平和の大切さや尊さを実感した。しかし、その時私は思った。広島だけを見て原爆について理解したように感じてしまっただけなのか、と。広島だけでなく長崎でも原爆や平和について学び、それで初めてその当時起こった事が少しだとは思いますが理解できるのではないかと。私達は原爆が引き起こした事について、もっと知らなければ

ならない。そして二つの地で学んだことをしっかり周りの人に伝えていくべきだと感じた。

長崎で過ごした三日間は本当に有意義な時間だった。沢山の事を学んだ中でとても印象に残っている事を二つあげたい。

1. 被爆者中村さんの体験講話

中村さんのお話は、私達が想像も出来ない程に悲惨なものであった。「原爆は身体に影響を及ぼしたり人の命を奪ったりするだけでなく、心に傷を負わせるものなんだ」という言葉が私の心に響いた。本当にその通り感じた。

原爆を落とされた側の被爆者の方々は、大切な人や家をはじめ多くのものを失い、精神的に大きな痛手を受けた。その痛手は被爆者の方に一生つきまとうものであるのだ。

2. 講話後のフィールドワーク

私達は、三つのコースがある内の山王神社コースを巡った。

二の鳥居（一本柱鳥居）、被爆クスノキ、長崎医科大学付属病院やその配電室、そして旧正門門柱だ。

旧正門門柱は二本の門柱からなり、5mの道の両側にそれぞれたっている。右側の門柱はすぐ後ろに崖があり爆風の影響は受けなかったが、左側の門柱に立っていた人は亡くなってしまったのだという。

つまりたった5mしか離れていないこの狭間が生死をわけたのである。

私は、長崎に来てこのレポートには書ききれない程に多くの事を目を見て、耳で聞いて、学んだ。平和というものがどれだけ大切

で尊いものなのかを知った。本当に貴重な体験だったと思う。この経験を少しでも無駄にしない為にも、まずは家族や友人などの身のまわりの人々に話して、広島や長崎で起こった出来事を知ってもらいたい。

そして、日本が今戦争をしていないという平和を実感し、世界に向けて平和の大切さを伝えていきたい。

～参考資料～

http://tmaita77.blogspot.jp/2011/08/blog-post_16.html

<http://www.nippon.com/ja/in-depth/a04002/>

—
“Nuclear weapons were made by humans and humans can conquer them, humans can abolish nuclear weapons.”

堀内 萌奈

2015年8月9日の長崎は暑かった。1945年8月9日の長崎はどれほど熱かったのだろうか。

1945年8月9日11時02分、1発の原子爆弾「ファットマン」が長崎に投下された。その瞬間長崎は、太陽の黒点と同じ4,000°Cの熱に覆われ、爆風が建物を破壊し、放射線が人々を蝕んだ。被爆体験講話をして下さった中村さんは、目の当たりにした70年も前のその光景を鮮明に覚えていると語ってくれた。

倒壊した家の下敷になっていた中村さんがやっとの思いで外に出ると、昼間にもかかわらず日暮れよりも暗く、大けがをした人々が

悲痛な叫びを上げて、そのまま死んだり、水を求めて池や川に飛び込み死んでいったそう。想像するだけで胸が苦しくなるのに、実際に体験した中村さんはどれほどつらい思いをしたのだろう。

爆風によってほとんどのものが失われたが、奇跡的にも僅かなものは残った。その中に1本のクスノキがある。二度と生えないと言われた芽がでたことで人々を勇気づけた。今では「被爆クスノキ」として原子爆弾の恐ろしさを伝えている。私が、この木を見て驚いたことは70年前に被爆したとは思えない程、葉が青々と茂っていることだ。しかし、近づいてみると、木の穴の中に方位磁石や石が入っていたり、プラスチックで覆われている部分があり、被害の大きさが窺えた。

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典は、世界で唯一の被爆した方々の合唱団「ひまわり」の合唱から始まった。長崎市長のスピーチや平和の誓いをした谷口さんの言葉は心に響いた。

このレポートの題名にした英文は、式典で国際連合事務総長メッセージをキム・ウォンス軍縮担当上級代表代行が代読したスピーチの一部である。「人間が作った核兵器は人間が克服でき、人間こそが核兵器を廃絶できる。」という意味だ。

では、現在世界中に1万6千発以上あるといわれている核兵器を廃絶するために、私達に出来ることは何だろうか。

それは伝え続けることだ。もちろん私の話よりも、被爆した方の話の方が遥かに説得力がある。しかし、今年初めて被爆した方の平均年齢が80歳を超えた。私達が直接話を聞ける最後の世代になると思う。だからこそ私達は聞いたことを次の世代に伝え続けなければ

ならない。私一人の力は小さいが、今回意見交換会などで出会った人達と力を合わせれば大きな力になる。私達が声を出し続ける事で中村さんが私達に託した「核兵器を無くすよう声を上げる」という言葉も実現するだろう。

この長崎平和使節派遣では、原子爆弾によって全てを失った絶望と、そこから立ち直ろうとする人々の力強さの両方を感じ取ることが出来た。重い病気を抱えていても弱音を吐かず、戦争のない世界を願い続けた永井博士からのメッセージ「原子爆弾は長崎でおしまい!長崎がピリオド!平和は長崎から!」が現実になることを心から願い、今回学んだことを多くの人に伝えていこうと決心させてくれた時間だった。

この文章を読んで下さったみなさん、平和の為、私達と共に原子爆弾廃絶の声を上げませんか?

Let's call for the abolition of nuclear weapons!!

長崎平和使節派遣

坂梨 太祐

～ 動機 ～

私は小学三年生の時、何気なく学校の図書館で手に取った『はだしのゲン』という漫画で、原爆というこの世をあの世に変える悪魔の兵器を知りました。その当時は、本当にこんな事があったのかと、目を疑いました。

そこで、私はその真実を確かめるべく、この長崎平和使節派遣事業に応募しました。

～ 被爆体験講話 ～

この話をして下さった方の名は、中村一俊

さんといいます。中村さんは爆心地より1・5キロメートル離れた農家で、被爆しました。一足先に帰路についた母親は途中で被爆し、とうとう遺体も見つかりませんでした。私が、11歳の時にこんな辛い思いをしたら、何で母だけ死んだのか、だったら自分が死ねばよかったと思うでしょう。つまり中村さんは、人や財産だけではなく、心までも、吹き飛ばされてしまったのです。

“なぜ罪もない人たちが殺されなければいけないのか”

それが、後に残った、ただ一つの心だった。

～被爆クスノキ～

このクスノキは爆風と熱線で、葉も飛ばされ中には空洞がある、被爆後70年以上は芽生えないと言われた可哀想な大きな木です。

しかし、ある日この可哀想なクスノキから枝が生え始めたのです。このことには長崎住民も驚かされ悲しみから立ち上がる一つの勇気となりました。僕は植物が立ち直ってそのことに勇気をもろう長崎住民たちの心が目に見えてきて、感動しました。

～一本柱鳥居～

この鳥居はまさに爆風と熱線でずたずたにされた一つの象徴ともいえるものです。爆心地の側の柱に彫られた字は熱線で溶けて見えなくなり、鳥居の半分は爆風で吹き飛ばされました。それでも、一本でも立っているその姿はまさに驚きでした。

～二日目 平和祈念式典参列～

被爆者の話では熱線は太陽が落ちてくるような熱さだとおっしゃっていました。そして、その熱さを受けた住民は『水を水を』と

川へ行ったそうです。地は焦げ風は嵐のように吹き荒れ多くの人々が悲しみと絶望のなか死んで行きました。そのことを忘れないように、こうして人々は毎年のように集まっています。僕たちは、千羽鶴をささげて祈りました。

長崎市長は言います。『平和の世界への答えは、学校の数学のように答えはない。』

～永井隆記念館～

この博士は、医者に余命3年といわれても放射能の研究をし、救援活動をした偉大な研究者です、1951年に享年43歳でその生涯を終えました。その先生は、この言葉を残しています。

“平和を祈るものは、一本の針をも隠し持つてはならぬ。武器を持っていては、もう平和を祈る資格はない。”

“戦争は愚かなことだ!”

この永井隆さんの言葉に私は胸を打たれ涙が出そうなくらい感動しました。

私は今回の貴重な経験を忘れず、永井博士のように愛に満ちた心で、原爆の怖さを戦争の悲しさ忘れないようにしようと思います。

～長崎観光～

こんな悲劇があったのに『悪魔の兵器』が世界にはまだ多く存在しているといわれています。

暑いけれど、夜景はきれいで、おいしいご飯もいっぱいあって、とても良い町でした。

核兵器はこの世から無くならないのか、原爆という殺人兵器で悲劇を繰り返されるのを防ぐことはできないのか、この三日間で僕は原爆が他人事でないことがわかってきました。

核兵器は70年間当たり前のようにつくられ続け、進化もしてきました。広島や長崎のようなことが起こったら一町どころではすまないでしょう。この悲劇を皆さんも他人事ではないと受け止めて、少しでも多くの核爆弾をこの世から無くしていきましょう。



平和のために私にできること

伊藤 亜希子

青少年長崎平和使節派遣事業に参加するにあたり、私は「戦争の悲惨さや平和の尊さに対する理解を深め、自分にできることは何かを考える」をテーマとしました。

今回の派遣での、「被爆者の方の講話聴講」「被爆建造物や原爆資料館の見学」「被爆70周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」などへの参加を通して、私が痛感したことは、戦争の爪痕は消えないということでした。

長崎の街並みは緑が多く、きれいなところでした。長崎市内は栄えており、ビルが立ち並び、目の前には海が広がっています。この地に原爆が投下されたとは到底信じられない景色でした。

しかし、長崎市主催の青少年ピースフォーラムへ参加し、実際に街なかを歩くうちに、その考えは変わりました。

歩いた道のいたるところに被爆建造物がありました。被爆クスノキの幹の空洞の中から取り出された人の頭よりも大きな石、左半分が吹き飛ばされ右半分だけが残った一本柱の鳥居などを見て、原爆の爆風のすさまじさに衝撃を受けました。

原爆資料館には、黒焦げとなった少年の写真や、高熱により手の骨とガラスが溶けてくっついた状態の実物などがあり、見学しながら恐ろしさで足がすくみました。原爆の悲惨さやむごさをまざまざと感じました。

被爆体験者講話では、講師の方から、第4人や一足先に帰路についた母親が原爆で亡くなり自分だけが助かったということや、現在も被爆による後遺症に苦しめられているということを知り、悲しくやりきれない思いでいっぱいでした。

そして、それ以上に辛いと感じたのは、被爆された方が今もなお自責の念を感じておられることです。今回のお話では、当時水を求める少年に後で戻ると約束をしたが、戻ったときにはその少年は既に亡くなっており、ずっとそのときのことを悔やんでいるとのことでした。原子爆弾は体への痛みだけでなく、心への痛みを、戦後70年経った今でも与え続けているのだと痛感しました。

たとえ街並みは復興しても、人の心の痛みは、いつまでも消えることはないのだと思うと、戦争と核兵器のない世界を実現していくことの重要性を再認識しました。そしてそれは、被爆者の方々の強い思いと願いでもあるのだと、8月9日の長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加して、被爆者の方々の姿から感じました。

戦後70年、原爆死没者の総数は増え、被爆者の平均年齢は今年80歳を超えたとのこと。戦争を知らない私たちが、戦争のない平和な未来を築いていくには、私たち若い世代が被爆者の方々の強い思いと願いを引き継いでいく必要があると思いました。

そこで、平和のために私にできることは何かを考えました。

まずは発信することだと思います。今回の長崎への平和使節派遣を通して、私が学んだことや感じたことを、家族や友人をはじめ、少しでも大勢の方に伝えていきたいです。戦争の悲惨さや原子爆弾の脅威、むごさをより多くの方に知ってもらい、そして二度と同じ思いを自分たちや未来の子どもたちにさせてはいけないということを、たくさんの人に感じてもらいたいです。

現代では、インターネットが発達しています。そのことを活かして、SNS（ソーシャルネットワークサービス）などの手段で、長崎で得たことをインターネット上で発信して、友人や色々な人々に平和について考えてもらうきっかけとなるようにしたいと思います。

小さなことのように感じられる行動の一つひとつの積み重ねが、平和への思いを多くの人々や未来につなげていけるのではないかと考えます。

また、自分や家族、友人のことを大切にすることも平和につながるのではないのでしょうか。今を生きている有難さを一人ひとりが感じ、自分や家族、友人のことを大切にすることや、お互いの良さを認め合い、相手を受け入れたり尊重したりしようという気持ちを持つことが大事なのだと思います。

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典における長崎平和宣言の中で、長崎市長である田上富久氏はこうおっしゃっています。

『私たち一人ひとりの力こそが、戦争と核

兵器のない世界を実現する最大の力です。市民社会の力は、政府を動かし、世界を動かす力なのです。』

今回、参加して感じた強い思いを胸に、自分にできることを考えながら、小さな力を大きな力にしていけるようにしたいです。

最後になりましたが、今回、このような貴重な機会を与えていただき、有難うございました。

4. 派遣をふり返って（感想）



渡邊 賢吾

原子爆弾によって全てを失った絶望、そこから立ち直ろうとする人々の力強さの両方を感じとることができました。永井博士のメッセージ「原子爆弾は長崎でおしまい！長崎がピリオド！平和は長崎から！」が現実になることを心から願い、今回学んだことを多くの人に伝えていこうと決心した3日間でした。

私は青少年長崎平和使節派遣事業に参加し、戦争の愚かさや戦争体験者の話をもっとよく聞いていきたいと思いました。しかし、もう被爆者が平均年齢80歳を超える現在、戦争を知らない私達がどのようにして後世に伝えていけば良いのか、それが私たちの今後の課題だと思えます。



堀内 萌奈

私は今回の長崎平和使節派遣事業を通して、とても深く原爆の恐ろしさや平和の尊さを学ぶことができました。中学校二年生のときに広島平和使節派遣事業にも参加をさせていただいたのですが、そのときよりももっと詳しくその惨状を実感することができて本当に良かったです。同じ過ちを繰り返さないためにも、一人でも多くの人々にこの事実を知ってもらいたいです。私は、まず家族や友人などの身近な人々から伝えていこうと思います。



古川 美幸

今回の長崎平和使節派遣事業を通して一番思ったことは、長崎も広島も変わらないということです。よく、長崎は広島より原爆の被害が小さいこと、何より広島より後に原爆を落とされたこともあり、「広島・長崎」の順で説明されてしまいます。しかし、場所や時間や規模などは原爆によって受けた心の傷には比例しないことが痛いほど分かりました。原爆で被害者が出るのは長崎で最後になるように努力していきたいです。



小野寺 紅永



伊藤 亜希子

私は、祖父母が長崎出身の被爆者なので、原爆の恐ろしさやむごさを聞きながら育ってきました。今回の長崎平和使節派遣事業にももっと学びたいとの強い思いから参加しましたが、派遣中ずっと今回のこの貴重な経験やまなびとったことをどうすれば生かして平和へつなげていけるのだろうかと考えていました。被爆者の方の当時の苦しみや今現在も続く辛さを、もう二度と、自分たちにも、未来の子どもたちにも味あわせてはいけなと強く思います。また、この思いを派遣レポートや何らかの手段で発信していき、少しでも大勢の方に伝えていきたいと思っています。

原爆がどれほどに人々を苦しめるか、この長崎平和使節派遣事業を通してわかりました。また、被爆者の話を聞いて戦争の恐さを知ることができました。とても貴重な経験だったと思います。

クスノキの話は特に感動しました。



坂梨 太祐

写真コーナー



長崎市内を散策



長崎医科大学 配電室



平和の灯事業①



平和の灯事業②



グラバー園にて



宿泊ホテル前にて

